東京歯科大学同窓会報

118号

昭和42年
8月10日

六月講演会
夏期講習会開催さる

講習の内容が充実

◎**講演会**六月十九日(日)母校第一教室において開催された。

会報百十七号の印刷の遅れからPR期間がなく、参会者がこれまでの講演会に比較して非常に少なかった。

しかし講演は夏期講習会に行なう実習の内容を紹介するものであり、熱心な若手講師陣の話に、会場で聴講する会員も熱心な質問を浴びせて納得のゆくまで疑問の解明ができたようであった。(写真は当日の講師)

◎**夏期講習会**　七月十七日より二十一日まで、六日間にわたり新企画で臨床の内容を充実させて行なった。一週間にわたる講習なので参加者は例年よりも少く二十名で台湾の呉先生も特別に参加された。講習は、小児歯科、矯正、保存、外科、補綴、放射線の各科について一日づつ行なわれ、午前中は学説、午後は実習というような予定に従って行なわれた。講習生が少ないことが幸いして講師と十分に接することができ、日頃の疑問ならびに学説に対して徹底的な追求がなされ例年になく講習に参加された先生方にとっては実積を上げることができたことと思われる。

講習参加者は次の通り(敬称略)

武田　清、深沢一祐、沢田善太郎、中嶋貞雄、箕田定明、酒井惣一郎、細山　愼、大坪正住、安保正憲、吉田登代、横瀬真清、五十嵐晃、山下敏彦、呉　仁祐、増田　一、萩原　弘、宇梶　淳、山下岩男、佐藤一、杉浦　宏

お知らせ

◉日曜セミナー

毎回好評の日曜セミナ8・9・10月は次のような内容で行ないます。奮ってご参加の程を。

○**八月二十七日(日)**　午前九時――午後四時
歯科医に必要な顎、顔面外傷の診断と処置(定員三十名)
中久喜　喬助教授
大森　清弘助教授

最近における交通事故の発生瀕度は、ますます増大の傾向にある。歯科医の診療室にも、顔面、口腔の外傷患者が運ばれて来ることがある。この際、これらに対する診断と処置法について知識を新らたにすることは、非常に意義のあることではなかろうか。

○**九月十七日(日)**　午前九時――午後四時
新しい材料の理工学的評価(定員三十名)
金竹　哲也教　授
高橋　重雄助教授

この二、三年の間に開発された材料及び日本で使用されている外国製品などについて理工学的の性質を紹介し、これらの材料の使用に際しての理工学的評価及び方法についてお話ししたい。

1　新らしい材料の傾向　2　陶材と陶材焼付用金属　3　鋳造用材料
4　充塡用材料　5　合成樹脂材料　6　印象用材料、その他

○**十月十五日(日)**　午前九時――午後四時
前歯部充塡のすべて(定員二十名)
石川　達也教　授

前歯部に対する充塡法には審美的要素が強く要求され、これに対して臼歯部のそれには機能的要素が強調されている。このような観点を尊重しつつ、母校保存学教室では現在如何なる研究的基礎に基づいて前歯部充塡が遂行されているかを説明すると共に、デモンストレーションの形で、前歯成形充塡の技法を紹介する予定である。

一、**受講料**　各課題につき一名三千円(当日ご持参のこと)。
一、**申込締切**　各開催日の一週間前(但し、その以前に満員の場合には直ちに締切ります)
一、**申込先**　東京歯科大学同窓会事業部

◉予　告

○**東京歯科大学同窓会総会**
日　時　十一月十二日(日)　場　所　母校講堂

○**東京歯科大学同窓会支部長・評議員会**
日　時　十一月十一日(土)　場　所　母校第四教室

○**東京歯科大学学会及び総会**
日　時　十一月十一日(土)　場　所　母校教室

本部短信

◇行　事

6月8日　会館建設問題打合会
6月11日　日曜セミナー
6月15日　6月定例役員会
6月21日　社保・国保審査員懇談会
7月17日～7月22日　夏期講習会
7月20日　7月定例役員会

◇役員出張

5月27日　静岡県支部総会
　田丸会長・大井副会長
　五十嵐理事
5月27日　宮城県支部総会山崎理事
5月28日　三重県支部総会
　長谷川副会長
6月14日　下谷支部祝賀会田丸会長
6月14日　世田谷支部講演会
　渡辺理事
6月24日　神奈川県支部講演会
　山本理事
7月13日　大阪歯科大学理事長葬儀
　田丸会長・福岡理事
7月15日　北海道支部連合総会
　田丸会長

◇支部長交替

長崎県支部長　田代弥平

◇火災罹災者

青森県支部　半焼　5　大鈴木　穫
〃　半焼　8　須郷省三

◇集中豪雨

7月10日　佐賀県・長崎県・福岡県・広島県・岡山県・兵庫県各県の水害地区支部長宛見舞状並びに被害調査書発送

集中豪雨による被害会員は左の通りです。心よりお見舞申し上げます。

長崎県支部
床上浸水　野本勝美
床下浸水　推　渡辺一郎　推　西　光治
3　江崎　清　30　江崎梅太郎
5　丸山　芳郎　9　村尾　栄
10　神戸　明　22　佐々木俊秀
佐賀県支部
床上浸水　大3　福重森次　35　飯田　正
床下浸水　17.922　麻生　奏　推　山口　強次
副島　満雄
兵庫県支部
床下浸水　推　坪井源透　大8　黒岩重満
床上浸水　推　木村春吉　36　木村　昭
11　川越　久雄　大6　小島　道彦
15　小出秀二郎　16　本多　宜章
16　広瀬　善一
床下浸水　2　末岡精次　12　安留静夫
大15　国重　正平　12　沢田　英三
23　守内　秀信　推　岡田　隼人
3　松村　覚現　322　長安　清
8　福田　信義　大13　猪坂　逸治

◇退会者

北多摩支部　推　安達　清

母校より

◇沖縄無歯科医地区巡回診療班

標記の診療班は日本政府の派遣するもので、厚生省の計画で各歯科大学（八大学）が交代で診療班を送っている。本年六月ですでに満六年を経過した。本学もすでに三回に亘って診療班を派遣した。七月から改めて次期計画（四二、七―四四、六）に入ることとなるが、本学はその第一班を承って来る七月三日第四回目の診療班を送ることとなった。期間は七月三日（月）から九月三十日（土）まで。この班員は講師田上隆弘（保存）助手須佐昭彦（口外）、助手大沢一博（補綴）の三名である。出発は七月三日九時四十分（日航機七四一）便。担当地区は与那城村の伊計島、宮城島、および東村平良等であるが、多少の変更がある模様。診療班員の連絡先は、沖縄那覇市日本政府南方連絡事務所気付である。

◇人　事

教授昇任　（四四、六、一三）
病理学　山村　武夫助教授
　病理学教室第二講座主任
病理学　田能庄三郎助教授
助教授昇任　（四二、五、一〇）
薬理学　中井　一仁講師
講師昇任
薬理学　都築新太郎助手
　（五、一〇）
保存学　篠田　登助手
　（五、一〇）
小児歯科　後藤　譲治助手
　（六、一三）
助手新任
　（四二、六、一）
市病内科　古見　耕一
辞　職
助教授　渡辺正（保存）五、三一
講　師　野間歌子（小児歯）
　四、三〇
助　手　阿佐見孝（口腔外科）
　五、三一
助　手　山口勝康（小児歯）
　四、三〇
助　手　篠塚裕康（補綴）四、三〇
助　手　新津裕子（小児歯）
　五、一五
専攻生採用
小野寺寛造（解剖）六、一四
中田　富子（解剖）五、一〇

呂　清寛博士
客員教授として待遇

高雄医学院牙医学系主任呂清寛博士は、本学昭和二十二年卒業の同窓で、同学院教授であるが九月初めに来日し、向こう一ケ年間研究（口腔外科）に従事することになった。本学教授会は同教授を客員教授として待遇することを決定した。

吉木、木津両講師帰国

昭和四十年七月渡米、バッファロ大学に客員研究員として滞在中であった吉木講師は任期満了となり、七月二十二日めでたく帰国し本学病理学教室に帰任した。

また、パリIADR分科会に口腔衛生学に関する研究発表のため渡欧中の木津講師は七月十六日使命を果して無事帰国した。

◇逝去会員

推　末広　武夫　明一三・三・二　兵庫
医　林　主計　明三・一　長野
医　宮本吉之助　明三・二・三　茨城
医　武田　昌三　明三・五・三　和歌山
推　山下　和三　明三・五・九　京都
推　高橋　金平　明三・五・三　群馬
明44　徳山　頼久　明三・六・三〇　長野
大　藤井　正枝　明三・六・七　香川
大12　鈴木　誠　明三・六・八　中野
大15　大塚　日臣　明三・六・二　徳島
推　阪本　政之　兵庫

謹んで右の方々の御冥福をお祈りいたします。

4つの色調で広範囲な用途

カラープロテクトセメント

歯髄保護と同時に永久合着裏装に好適
非膜度が薄く，前装歯に賞用されます。

東京・渋谷　ネオ製薬工業株式会社

◆包　装◆

ライトイエロー	30g	¥ 280
ジンジバルブラウン	30g	¥ 280
ライトグレー	30g	¥ 280
ゴールデンブラウン	30g	¥ 280
液	50g	¥ 200
1セット		¥ 1,200

松宮教授、パリのFDI総会に招聘さる

第十四回国際歯科連盟（FDI）学術総会は、七月七日から十三日にわたり、パリ市において開かれるが、これは一般の年次総会とは別に、五年目に一回づつ開催されるものである。

開会式は、七日午前九時からシャイヨオ宮において、仏国総理大臣以下政府閣僚、高官臨席のもとに、世界五十数ヶ国からの数千に上る参加者の列席によって行なわれ、翌八日から六日間にわたり、学会の幕が切って落される。

この学術総会のハイライトは、世界各国から選ばれた三十五名の学者による近代歯学の粋を誇る特別講演であって、前回の西独ケルン市での学術総会いらい、五年間における研究の進歩のあとに、全参加者の眼が集中されている。

松宮教授は、日本から招聘された唯一の特別講演者として、十二日に「乳歯の根管治療と永久歯保護に関する実験病理」について、同病理学教室が多年世界的に知られた研究業績をまとめて発表する予定である。

また、同日のテーブルクニックで、やはり本学の竹内教授は、「合成樹脂の塡塞による窩溝の齲蝕予防」を発表するが、これまた、各国の研究者の注目をあつめることであろう。

いずれにしても、この世界的な学会において、学術の伝統を誇る母校の教授陣が活躍する成果を、われわれは深く期待してやまない。

血脇先生の逸話
感謝の言葉

荒木紀男

近く血脇先生の百年祭があるから先生に関する事を書く様にとの事であった。

先生の逸話となると多くの同窓各位から沢山に寄稿される事と思うが、私は先生に対する感謝の言葉を書かせて頂きたい。従って内容は「血脇先生と私」という事により甚だ恐縮だが不悪御了承願いたい。

血脇先生が高山歯科医学院を東京歯科医学院と改名して引受けられたのが明治三十三年（千九百年）先生の三十才の時である。丁度其年の一月に私は故高山紀斎先生の診療所（銀座三の十七）の学僕となったのである。

学校経営の事などで血脇先生はよく高山診療所を訪問された。其当時から先生の知遇を受けた。

明治三十六、七年先生の学校へ通学した。学校は始め神田錦町遠山椿吉博士の顕微鏡学院で開校され、後現在の所三崎町に移転された様に記憶して居る。其当時の学校は高い黒塀で囲れて居り、北側に門があり、校舎入口の左側に小さい事務室、右側から校舎に入る様になって居た。室は東から西に長い一室であった。

先生の治療所は今の電車路に面し裏側に門があり、治療所と学校とは廊下づたいに連絡されて居た。

通学は夜学校であるから、弁当持参で、銀座―鍛冶橋―丸の内―（郵船会社の赤練瓦建物一つだけで、あとは草ぼうぼうとして原っぱであった、勿論電燈などない）神田橋―三崎町と約四、五十分の徒歩である。夕食は先生の御厚意に依り診療所の台所で、其当時の塾生は、水野寛爾、森恭平、岡嶋圭治、阪秀夫、中嶋秀造氏などで食事を共にした。弁当の内容は明けても暮れても通り相場である、晴の作る「ヒジキとコンニャク」でイタメツケられた。冬になるとコチコチになって箸も通らぬ始末だ。

ある時奥様がたまたま台所へ見えこの状態を見て気の毒に思われ「荒木さんあなたは、いくら若くてもそんなのを食べつづけたら、からだによくないから、御馳走はないけれども宅の書生さんと一緒に温いものを御上りなさい」といってコチコチになった弁当を取り上げられた。それから永い間、毎日弁当と温い御飯との取り替へであった。十代の食気の旺盛な時代に大きなオハチをかかえてたらふく温いものを馳走になった事を想像して下さい。

血脇先生があれだけの大きな仕事をなされた其内面には、奥様の内助の多かった事は言をまたない。

約三十余年前故野口英世博士の伝記を書くために来朝された、米国オハヨー州立大学医学部のエックスタイン博士に面会し、一日を費した節、野口博士が世界的に多くの研究を発表されるにいたるまでの陰には血脇先生の犠牲的援助がある、又同夫人の内助も多大なものがある事を話した。同博士は非常に感銘され、同氏著英文、野口英世に右の事を銘記されて居る。

私の在米十四年其間、野口先生と同居自炊生活三年間在紐中指導を受けた、血脇先生からの口添えがあったから故に愛顧されたのだと思う。

大正七年（千九百十八年）秋故松風嘉定氏（現松風陶歯KK初代社長）から招聘され、京都で陶歯を製造す可く帰朝した。翌年一月血脇先生から東京歯科医者同窓会として、君の帰朝歓迎会を開きたいとの事で、甚だ恐縮であったが上京した。丁度その時はミゾレ混りの大雪で、ゴム長でもなければとても歩けない、ぬかるみの状態であった。モーニング着用に高足駄といういでたちであった。さて開会に次で紹介の辞は先生特独のあの微笑を含み乍ら先生自らされた。

「荒木君の学校時代は銀座のハイカラ男で通って居たのだが、在米十余年後の今日モーニングに高下駄で出てきた、随分バンカラに変ったものだ、是から松風で陶歯を作るから諸君援助をしてやってくれ給え」という意味のお話であった。夫から数年後松風の陶歯を各地の学会などで宣伝旅行をした時、血脇先生もよく地方の学会に顔を出された。宴会が始ると何時も先生は上座で私は末席に居る。先生は私の顔を見ると必ず「君前え来給え」と先生のすぐ横え「座らせられ、席上の皆さんに紹介され役員の方をドマッカせられた。

今の学校の土地は三菱系の元祖豊川量平氏から入手されたのですが、其長男の順弥氏とは紐育時代からの親友である事を血脇先生が知って居られて、或時先生が「其頃学校の経営に困って居るが、君が豊川君と友達だそうだが七千円ばかり借りて貰えないだろうか？」とたのまれた。其時私は「豊川君にそんな事を頼むのは困りましたな」と即答したら、そうかなあと困った様な御返事でした。夫から数年後に其の事を豊川氏に話をしたら「夫れは残念だったなあ！」との返事であった。（其時の七千円は大金であったのだ）

猶書けば沢山あるけれど余りに私事にわたるから、茲では省略させて頂く。先生は私共後輩に対し、常に温情をもってプロモートする様に最大の援助と期会を与えられた。血脇先生には常に筆や言葉でいい現し得ない心からの感謝をして居る。（四二、六、四）

市川病院物語

高道

（二）

予科学生の寮生活

予科長兼病院長の花沢先生は、学生達の居住難を察せられ、当時空室となっていた第二病棟の数室を学生寮として提供せられ、ここで寮生の自炊生活が始められた。この頃、毎週土曜日は所謂、食糧休暇なので、この日の朝ともなれば大きなリュックをせおって総武線や、京成電車で千葉方面に買い出しに出かけた。勿論、炊事場の設備などないので、各自の部屋で電気コンロで煮焚をやる。そのため失火の危険を慮れて朝晩二回、各部屋を看廻り、火気取扱いの看視を励行した。万年床は言はずもがな、枕元に鍋、釜、茶碗等の食器は散乱し、その壮観まことに目を覆うものがあったが、幸に出火をみなかった事は全く僥倖という他はない。

一万二千坪運動場の危期

当時学校所有のグランド一万二千坪は、食糧増産の国家的要請と学校側の好意により地元須和田の農家に無料貸与していたが、二十一年七月本校は本邦最初の歯科大学として発足することになり、大学附属の体育施設として運動場にする必要に迫られた、そこで、返還を要求したが、終戦後法制化された農地法を楯に容易に返還に応ぜず、一時危期に陥った。そこで学校側の指示により市川市の農地委員会の中の或る種の思想団体に接衝の必要から、当時市川市会議員で、この方面に顔の広い故矢野恒之助さんに貸地返還の斡旋を依頼し、同時にこの敷地が大学校舎建設の予定地であることを公示する目的で、私が悪筆をも顧みず「東京歯科大学建設用地」としたため、木標を立てた。さらに建設の意志表示を明確にするために、現在の進学課程構内の西北隅に建築工事事務所」の名目のもとに一寸した二階建のバラックを建てた。

以上のような苦肉の策と矢野議員のお骨折りが効を奏してやっと危地を脱することが出来た。この急造の飯場には、当時市川病院歯科に在勤の正木講師（前東京女子医大助教授）と技工士の工藤の両君が自炊生活で宿直に当った。このバラックは、現進学課程校舎の新築起工に際しとりこわされた。

補綴の指南役は堀江先生

開院当初、本校から派遣された医局員は主として外科と保存からで、補綴の方は甚だ心細いのでこれに頭をいためられた花沢先生は、この方面の権威、堀江先生に特に懇請して週に一回御指導を願うことになった。先生は毎週芝高輪のお宅から市川までお運びをいただき、総義歯、局部義歯、インレーなど臨床に直結したテクニックの御指導を仰いだ。市川病院出身の臨床家で第一線に活躍しておられるかたがたは、当時身につけられた堀江システムを補綴診療のよき指針として成績をあげておられることと思う。何としても終戦直後のことで印象材、模型用石膏、それに埋没材など現在のものとは比較にならぬ粗末なもので、石膏模型など原形のままで、印象からとり出すことに困難を感じた。この頃花沢先生の御指導で歯研でようやく線に引かれた十八・八鋼のクラスプ用線を、この脆弱な模型に合せて屈曲することは思いもよらぬことで、堀江先生の御指導で原型からメロットメタルの歯型を再製し、これに合せてようやく鈎らしきものを曲げることが出来た。

また耐火性埋没材のクリストバライドが今のように製品として販売されていない時代なので、これも花沢先生の御指示で当時市川にあった繊業会社末野技師（元東京医科歯科大学教授）にお願いして原礦を焼いていただき、正規の膨脹率に至らないまでも、ともかくも臨床に間に合わせたことを思い出しまことに感慨深いものがあります。

運動場の蔬菜園リーヤカーは乗用車に

須和田の農家から返還されたグランドの一部を一人当り十坪位に仕切って、水道橋の先生方の蔬菜園が営まれ、ここに薩摩藷、唐もろこし、南瓜などが丹精こめて栽培されていた。日曜ともなれば戦時態勢そのままのいでたちで、大きなリュックを背負った先生方が収穫物を詰めこんで帰られるお姿が見られた。この頃、市川駅広場に左右二列に並んだ闇市場があって、駅前の交番は闇物資の検問所の感があり、よく闇屋と間違えられた方もあったように思われた。岡田農園でよく頂いたふかしたての薩摩藷の甘味は忘れることが出来ない。（この項次号につづく）

杖痕クラブ

創立三十五周年記念祝賀会開かる

アンデス遠征計画発表

創立三十五周年を迎えた母校山岳部OB「杖痕クラブ」では、去る七月八日、午後一時半より母校において記念式典と祝賀パーティを催した。

東北、北陸、山陰、近畿と全国各地より参集したクラブ員五十名。母校からは、矢崎、福島両名誉教授、関根、松井、長尾、木村、上条の五教授も来賓として御出席になり総計七十名に達する盛会であった。

この催しの実行委員長佐々木達雄君、クラブ幹事長野口陽君の挨拶につづき、福島秀策先生、長尾喜景先生の祝辞があり、福島先生外十五名に表彰状と記念品が贈られた。これに対し、城谷加寿雄君が代表して謝辞を述べ式典を終了した。

アンデス遠征計画発表

野口幹事長より、明年四月から四ケ月の予定で、ペルー・アンデスに杖痕クラブより学術調査と登高を目的とする遠征隊をおくる計画があり、目下着々準備が進められている旨の発表があった。

式典終了後、直ちにクラブ室で祝賀パーティが開かれ、河辺清治君の挨拶、大津新一君、五十嵐嘉秋君、関金三郎氏のスピーチがあり、矢崎正方先生の音頭で乾杯。賑かな歓談が続けられた。

四時半、クラブ員はバスで陣馬高原「夕やけ荘」に行き、ここで夜を徹してのコンパが開かれた。先輩、後輩共に山の歌をうたい、盃をあげまことに意気盛んなものがあった。

支部のうごき

◇栃木県支部

昭和四十二年五月二十一日、栃木県支部では那須高原展望台那須ホテルで、同窓会会長田丸将士先生、母校教授高橋庄二郎先生を迎えて、昭和四十二年度の定時総会を開催した。

この日五月晴れの日ざし輝き初夏絶好の行楽日和、定刻までに続々参集して午食を共にして後少憩の自由散歩、高原美を満喫。唯々愉しい旅でもあった。

午後二時総会開会。栗原副支部長の開会の辞で日程に入る。岡田支部長より不慮の災難にて半年余り入院加療呻吟久闊を詫び、学債応募の好成績、一日大学入学の成果、その他本会発展のための協力を懇請され、午後粉骨砕心献身の熱誠を披瀝せらる。続いて田丸同窓会長より母校の現況と将来の飛躍について、言々句々赤々裸々に真情を吐露して訴えらる。一同感銘協力を誓い拍手やまず。議長に石川赴夫先生を推せんして議事に入る。

庶務、事業報告。会計収支決算報告を異議なく承認可決して役員改選の件も協議会によって円満解決、再開して現岡田正信支部長其の他全役員再選と決り夫々就任決諾さる。

協議事項たる本年度の事業計画案たる一日入学の件その他一切現役員一任と一瀉千里に終り黒崎副会長の閉会の辞にて無事総会閉会となる時に午後四時。少憩して。

学術講演、「顎骨々折処置について」高橋教授の講演を傾聴、頻発する交通禍による骨折の処置についてスライドによる説明にて貴重なご研究と蘊蓄を拝聴、明日えの資として二時間余りの研修して講演を閉づ。

午後六時四十分懇親会開幕。丹前姿で記念撮影。着席。岡田支部長、田丸同窓会々長のスピーチ後椎貝元老の音頭で乾盃、那須美妓のサービス、舞踊に興じて宴酣となる。会員のかくし芸、のど自慢、特に椎貝元老の熱演に拍手やまず、時の移るも覚えず懇談歓談実に和気あいあい九時閉幕。

翌朝、朝鍋を共にして別を惜しむ。医療保険にまつわる難局に唯々協心協力を痛感する現時点においての会合は必ずや期せずして一大成果をもたらすものと確信して各位のご健康を祈り筆を擱く。（牟田健作記）

出席者（順席不同）

岡田　正信　岡田　正義
椎貝　敏郎　岡田　治清
岡田　一郎　黒崎　広教
栗原　正三　櫃石　武則
臼井　良夫　守田　哲三
神山　燮　篠原　誠一
正岡　寿　天沼　竜雄
大久保雅順　宮島　一郎
伊沢　八郎　牟田　健作
及川　真二　大坪　正佳
石川　赴夫　石川　融
長竹喜三郎　村井　寛憲
三田　保　鮎瀬　洋一
松本　茂男　鈴木　和雄
鮎瀬　泰典　小滝鐙巳男
井上純一郎

◇三重県支部

日　昭和四十二年五月二十八日
所　鳥羽市　姫島ホテル

真珠筏が初夏の日ざしを一杯に受けて、まぶしいまでに輝いている此処、伊勢志摩国立公園の景勝の地、鳥羽市での支部総会は、本部より副会長の長谷川慶蔵先生、名誉教授の堀江鉦一先生をお迎えして、盛大な裡にも和やかな雰囲気に満ち溢れていた。

定刻、午後一時を少し過ぎた頃より総会を開催。辻村副支部長司会の下に栢植支部長の開会の辞並びに全国支部長会の結果報告、辻村副支部長の一般報告、北野幹事の学術委員会報告、落合幹事の会計報告と次々と行なはれ、引続き協議事項に移り支部則改正並びに次期開催場所の決定等も円満裡に運ばれ、最後に会員の声として『会員子弟の母校への進学に対する一層の考慮を強く要望する』との発言あり、支部発展の為にも大学当局に強烈に働きかける必要ありとの声に全員の拍手を沿びました。

続いて午後三時より講演会に移り副会長長谷川先生の〝同窓会本部の動き、並びに母校の近況について〟堀江鉦一先生の〝上品な総義歯について〟の有意義なるご講演を拝聴、いづれも熱のこもった両先生のお話に時のたつのをしばし忘れた感がありました。

終って午後五時より美妓多数を加えて一大懇親会に移り、席上、堀江先生の特技たる名手品も飛び出し和気藹々裡に八時半終宴。

当日の出席者

本部より　長谷川副会長
堀江名誉教授ご夫妻
岐阜県より特別参加　高木秀吉氏
本県会員平松、勝田(多)、山際(源)
横田、坂井、栢植、門脇、落合、
小川、宝田、神山、稲森、加藤
(正)、杉山、辻村、石川、北野
(晋)、高森、勝田(邦)、山口(貞)
山口(幸)、松崎、山際(貞)、中
西(富)、中西(亨)、古川、寺本
(藤)、寺本(康)、鍋島、谷崎、
楠崎、相野、山口(信)、稲浜(弘)
稲浜(洋)、清水の各氏(栢植記)

◎次号原稿締切
九月二十日（水）
◎クラス会だよりは三百字程度以内にして下さい。
◎御投稿を歓迎します。

クラス会だより

東遊会

春期懇親旅行会

昭和四十二年五月十三、四日南伊豆の中心下田町外浦海岸「魚荘」において開催した。この地は周知の通り嘉永六年（一八五三年）黒船四隻が来航し、開国の歴史のページを開いたところであり。又舟橋聖一の小説「花の生涯」に出てくるお吉の才色に天賦の美声、又船大工鶴松との情緒豊かなりし港町である。午後六時十五分井上会長起った。ここに同勢二十九名の御参会を得たことは誠に欣快に堪えないと謝し旅館は一流とはいい難いが鮮魚の生つくりは正に一流と折紙をつけたいよろしく御賞味を願いたいと開会の挨拶をのべ、三輪副会長から東京歯科大学同窓会、三浦宗一氏、中久喜八十氏、大多和彦吾氏、大塚豊美氏、原田進氏、杉江玄照氏より夫々多大の御寄付を頂いたことを披露した。

地挽鐘雄君の司会によって開宴、渡部重徳君の音頭をもって、一同乾杯、恒例に従って着席順に自己紹介を行なった。今度新たに伊藤徳松君（茅ケ崎市）岡田弥八君（横浜市）中原玄昌君（足利市）が入会した。下田美妓数名何れもお吉にあやかって美人揃いが酒間を幹旋し話もはずめば、杯も廻る。魚は新鮮な、しかも出生魚の一つに数えられる鰤や小鯛伊勢えびなどの生きづくり誠に美事な出来栄えで一同歓を尽して時の移るのを忘れ興趣尚つきなかったが午後九時各自の部屋に引きあげた。

あければ十四日（日）朝八時過ぎ一同は再び広間に集り満ち足りた面持にて朝の挨拶を交わし朝食の膳に着いた。宴会の席上聴き渡らした佐瀬蔀君の「磯節」を所望した。流石に嘗てNHKの三つの鐘を鳴らして名調子一同、然として聴き入った。

ついで大塚副会長は人の和を強調して開会の辞をのべた。この日叙勲受章された同窓の顕彰会が帝国ホテルにおいて開かれたため小山内、塩見両君を含め三、四の会員はこれに出席するため早朝の急行電車で帰京した。井上、大塚、三輪君の外数名はハイヤーを駆って石廊崎方面の観光と試み、下加茂の熱帯植物園に立寄り同園独持の新鮮なフルーツの盛合せを賞味したこの道中ナマコ壁の民家が所々に点在し町の姿が明治の匂いが強かった。午後四時十六分下田発の急行電車で帰途についた。

旅先で拾い集めし小石にも親しき友の面影浮ぶも。（三輪記）

出席者（順不同略称敬）

佐瀬、大多和、大塚、小倉、小山内、黛、中原、中沢、財部、遠藤、地挽、折井、宮下、塩見、小林、畦森、伊藤、萩野、渡辺、鹿野、入江、森野、島田、井上、三輪、八杉、斎藤、岡田、三浦

互発会

大正八年卒

昨春、佐世保の総会で、今年の開催地は岐阜と決定。地元の新井、大森の二人が世話役となって五月二十二日より二十四日にわたり名勝の地長良川畔で近頃にない好天に恵まれて、いとも盛大に開かれた。

二十二日午後三時、岐阜市長良川畔ホテルパークみなと館に集合した会員は、新井森三、大森保、伊藤英一郎、尾関正、大泉豊太郎、加藤大次郎、河野源造、橋高八郎、高　達、杉山開多、田中健之助、西村禎祐、松本績、吉沢八郎、和田直樹、橋本太一郎、宇賀武文、原田栄三の諸君、会員の大部分が夫人同伴、総数三十五名となった。

卒業以来五十年の風雪にたえた古稀の顔は真につやつやとしてまだ当分はという感じがお互いの脳裏を走ったように思われた。

開会に先だち、五十四名の物故会員の御冥福を祈り議事を了えた。五時より千年の伝統を持つといわれる待望の鵜飼見物が始まるので、一同浴衣に着かえ遊船に分乗。折から迫る夕暮れの川面に燃えさかる篝火に熱し出された鵜匠の見事な十二本の綱さばきを心ゆくまで観賞し、遥かに金華山頂にかかる名月を仰ぎながら帰宿。

明けて二十三日午前九時半ホテル出発。眼にしみる新緑の金華山ドライブ。水道山に登り眼下に岐阜市の全景を一望の中におさめ、遥かに岐阜城も眺められた。市内の要所を見学しながらバスは一路各務ケ原市を縦断して犬山市に向う。途中、寄神、田県神社にうやうやしく参拝。引き返してコースを明治村にとり途中入鹿池などの勝景をながめながら正午明治村に到着した。ここで昼食をすませ入村、記念撮影を了えた。明治まではこの時代の建築物、器具、明治天皇の御料車など拝観。今は遠き昔のよき明治の御代を追慕しながら車は下呂温泉に向った。車窓に展開する飛水峡や中山七里の勝景を眺めつつ、白川村の重要文化財として保管されておる合掌作りを見学、平安朝の昔を偲びつつ午後五時下呂一流のホテル水明館につく。この温泉は硫黄泉で泉温摂氏六一、五度そのままではとてもはいれぬので冷水で適温とし一風呂浴びて大宴会場に参集。万場一致来年の開催地は関東地区と一決して開宴。美妓のお酌に齢を忘れ飲む程に食う程に五十年の昔にかえり、とっておきの隠し芸など続出、盛会裡に会を閉じた。

明けて二十四日日本ライン下り。

クラス会だより

朝九時バスで水明館出発、飛弾川の美しい渓流をめでながら美濃加茂市太田の乗舟場より二隻の舟に分乗。舟は巧な舟頭の櫂さばきに奇岩の間を縫い、清流のしぶきを浴びながら犬山橋着舟場についたのが十二時半。川畔の犬山城下名鉄犬山ホテルにて昼食。来年東京地区での再会を誓って散会、楽しかった三日間の思出を残して各自帰路についた。来年のこの会にもどうぞ元気なお顔を見せて下さい。（新井守三記）

赤心会

大正九年卒

紀州路の赤心会総会記

去る五月二十二日から二泊三日にわたる紀州路の赤心会総会は段々数の少なくなった我々クラスメートに取り本当に楽しい思い出の最たるものであったといえる。

新幹線ひかり号で九時出発楽しい繞舌の間に走って二時間、もう名古屋だ、次に勝浦行「特急くろしほ」で勝浦に着き一寸船で運ばれて、東歯大赤心会御席と大書した看板の立てられた。浦島という旅館についた。

一寸休んで遊覧船に乗せられて紀の松島廻りというのをやり、丁度いい具合に空腹になって、旅館の忘帰洞という岩の洞屈内の少々屁の臭いのだよう、つまり硫黄泉につかってさて夕飼宴会となる。アルコールにハッパをかけられてか奇舌を弄して暴れはしないが夜の更けるのも知らず怪弁怪談は当るべからざるものがあり、楽しい極みであるが果つべくして果て知らぬ宴も遂に果てた。

翌日九時三〇分赤心会様貸切の大型バスに乗せられて、那智山周遊に向う。

高さ百三十米のその滝、眼には見えぬ神おわすらんその壮厳な姿。その神韻に打たれ暫し唖然として眺め入り何時の間にか眼を閉じて合掌していた。離れ難く去り難い滝を後に信仰のメッカ熊野三山に詣で、やや疲れて再び段を下り其処に予約された席でバーベーキューで冷いビールをキューッとやって息をついたが幹事のことの運びのあざやかさに一同大いに嬉しがる。休息一と時再びバスに乗る。

勝浦に戻って白浜川久ホテルに着いて其処で田村、辻井、水野史郎、それに大谷一郎が加わり今回の全員の顔が揃った。

夕飯迄は間があるというので附近を一巡しようとまたバスに乗りいろいろの名所を見て回る。白浜の水族館の水槽に泳いでいたフカや気味悪いウツボの集団が印象的であった。千畳敷と称する岩盤に立って太平洋の遠く霞む辺り、晴れていたらアメリカが見えるかも知れない。此処は本州の最南端の一寸手前である。静かに立って時を忘れ、自れを忘れて濤声に耳傾け、暗し。潮の香に酔う。

川久ホテルは多分日本のホテルの中の最も高級なものの一つに相違ない（今迄こんなホテルは見た事がなかったナ）と内心驚いた程である。そして今度のその衝に当った準備委員諸君が財閥で殊にも、明楽は交通公社の案内人を専属に連れて万事をまかして只その男の後についていればいいようにした所など天晴れ見事という他はない。幹事諸君の絶大な骨折に只々深く感謝するのである。

二泊三日に渡った楽しい集いも早や過ぎて別れとなると名残りは尽きない。新大阪新幹線のホームに列車を待っていると、田頭がやって来た二度も胃潰瘍をやったというが、絶対大丈夫といい、絶対大丈夫さと皆に励まされニコニコ微笑む彼の顔に夕陽が紅く映えていた。

来年は、梶と水野が幹事を買って中国地方でやろうよ、と楽しい約束が出来た。

この次は、杉山学長も必ず出る。岩垣の痛風も癒るだろう。キット癒る。（小畑記）

出　席　者

河村喜久治、大久保禎五郎、高木彰一郎、本間太郎、武藤　実、高野福次、長田卓爾、同夫人、梶　剛、寺島謙次、水野史郎、辻井卓郎、兼松豊、田村利威、明楽佐一郎、大谷一郎、田頭規矩一、小畑　蕃

更始会

昭和三年卒

六月九、十、十一の三日に亘る秋田、青森地方の旅行も幸い好天に恵まれて全行程を全員無事におえ、地元諸君の推薦された所を大体見せていただいた。一言にしていえば「来て見て良かった」につきる。

今年は「楽な日程で」という皆の要望で、毎日、朝九時ごろ出発、午後四時ごろ宿に帰着したが、やはり最終地青森市に着くころには疲れたし、全員日焼けもした。だが来年の予定地九州を思うと、また新たな喜びが湧いてくる。

雄大な男鹿の景観、深緑に映える十和田湖。

総会は十日夜、宿泊地湯瀬温泉ホテルで開催された。開会に先立って記念撮影、次いで清水幹事の司会により、山本代表幹事から庶務報告を兼ねての挨拶、終わって物故会員に黙禱、山路幹事の会計報告があり、議長に浅野誠君（舞鶴）を選び議事に入る。

一、次年度総会開催地の件は江崎清君（佐世保）推薦の九州と決定。

一、役員改選の件は三人の幹事とも留任と決定し議事を終わる。

旅行中、とくに印象に残った東北の酒と美人、その他民芸などについてご報告しよう。秋田、青森とも、どこへ行っても酒は大変美味しい。爛漫、両関、大平山、高清水、ことに高清水は東京に出荷せず、酔人の銘酒とか。コクの濃さは、なるほど東京では味わえない。酒の次は美人の話。秋田おばこに雄物川系と米代川系とあり、その特徴は丸顔と瓜ざね顔、まぶたの一重と二重にある等々、ガイド嬢の説明を興味深く聞いた。横綱大鵬の新夫人はどちら系とか、聞いたが忘れた。

郷土芸能は男鹿の「なまはげ」、民謡は秋田おばこ、秋田音頭＝＝秋田の国では雨が降ってもから傘などいらぬ　手頃の蕗の葉……。

地元料理ではショッツル、男鹿の磯焼等々が忘れられない。

出　席　者

西山義雄、佐々木高義、渡辺元広、中村利雄、佐藤静郎、三浦和雄、成毛　寿、浅野　誠、山本糧三、千野純次、加藤安雄、田沢二郎、岡本公平、江崎　清、山路千秋、成田忠直、黒田正智、片岡鋸雄、石川光寿、清水　明、鹿島健太郎、山口　朗、荻沼護郎、太田堅蔵、麻生多吉、鈴木武雄、三宅重吉、外夫人十一名

クラス会だより

右の方々に地元会員の選定による木皮(桜)細工の記念品が渡された。（山本記）

昭二会

昭和六年卒

第三十六回総会 ヤアーオー生きてたか、南から北から四国松山の道後温泉に集まって来た。今年は玉井君の骨折である。会するもの四十八名、京都の第二十七回昭三十三年以来夫人同伴を原則としているだけに夫人連もすっかり仲良しになって懐かしい会話が交換される。

生きていて良かったという実感がしみじみと感じられる時である。遊覧バスで松山城、石手寺、子規庵、奥道後等の名所を回る車中は毎日会っている人達の様な和やかな交歓風景で爆笑の絶えまもない。ホテルに帰って総会は水の流れの如く進んで来年度の開催地は長野県の小林喜久丸君に全員拍手でバトン(昭二会旗)タッチされる。黒四ダムを目標のコースが研究される筈である。宴会は賑やかに楽しく例に依って山下君の独り舞台となる。最後に校歌と級会歌を合唱する夫人達は感激で眼頭をおさえる程のクライマックスだった。卒業して三十六年目還暦を前後する親父さんもぐっと胸に来るものがある、若返った血潮が学生時代に逆流する。

翌日は松山市外鹿島に遊ぶ波穏やかに緑の色美くしい瀬戸の小島で味う名物鯛めしの味も級会のムードの中では又格別である、中食を終って明年の再会を約して袖を分った。これを機会に四国一週の旧婚旅行の幾組かがあった。級会は参加することに最大の意義がある元気で毎年馳けて参ずることこそ幸福の最たるものであると信ずる。来年の信州集会には万難を排して参加されんことを…

参会者氏名、倉田、五十嵐(時)、小林(喜)、加藤(正)、八百枝、中村(真)、武田、須佐、安間、高橋、矢内、玉井、藤原、上野、小川、青山、山下、大鶴、島田、西堀(以上同伴)大森、船渡、松橋、橋本、水川、神頭、鈴木(文)、北条、金子、

昭四二、六、二五（西堀記）

三辰会

昭和七年卒

三辰会地方懇親会（別府にて）

三辰会も卒業以来本年で三十五周年を迎えて去る五月二十一日（日曜日）別府に於て地元野上君のお骨折で三回目の地方会を開いた。

昭和三十八年六月、第一回は会津の東山温泉、第二回は四十年十一月、関西地方で大津のビワ湖畔紅葉ホテル、そして今回となった。

全国各地から列車、船、空路、それぞれのコースをとって参集、当日午後は野上君の案内で市内の名所巡り、夕刻鉄輪温泉、鬼山ホテルに集合、午後六時頃より三辰会の地方懇親会を開催した。

三十年以上も会わなかった友にも会える。東京での会には遠方の人はなかなか出てこられないが、地方会を開くと、その地方の諸君は皆出席して下さる。何ともいえないなつかしい雰囲気である。今後も、引続き開催したいものだ。次回は当日の提案で、昭和四十四年に北海道方面に決った。三辰会の諸君今から御計画をたてて頂きたい。

夜半に至る迄歓談、話は昔話、子供の話、孫の話迄出てくる。明けて二十二日、名残りを惜しみながら散会した。

出席者氏名（順不同）

米沢、久米、野上、宮原、関根、楊、根岸、郷土(夫妻)、石田、深水、佐藤正夫、佐藤一、井比、山口、松岡重雄、歌野原(夫妻)、田島、堀、大久保、清水

なお、今秋の同窓会総会当日（十一月十二日(日)の夜は、三辰会総会を計画しておりますので御出席の程を。（清水記）

一志会

昭和十七年卒

重ねて総会のお知らせ

日程　九月二十三日（土）夕刻までに道後温泉集合。同所に一泊。

二十四日（日）高知。総会、観光。同所泊り。

二十五日（月）朝散会。

出席予定者（六月末現在）

○藤原、後藤、畑中、○堀口、飯野、池田清、岸、小柳、桑ヶ谷、馬島、三村、難波、○西村(寛)、野口(春)野口(多)、小原、奥平、大畠、大野(喜)、大野(実)、○坂、○関口、○塩田、島田、正畠、白井、亀山、杉田、忠隈、高橋(立)、宇野、矢吹、○吉田(良)、吉井、蒲生、大塚

(○印は夫人同伴)

申込は、松山市一番町二ノ九ノ一　大野喜市まで

○出席の御返事のあった方には、詳細お知らせしましたが、なお、もう一度通知するそうです。

○まだ申込みをされてない方で、詳細を知りたい方は、大野君までご連絡下さい。

○一人でも多くの参加を期待しています。（幹事）

八索会

昭和三十五年卒

四月二十三日に急逝されました伊東敏克君のお宅に伺った際の報告をしたいと思います。

「二十三日の日曜日、いつもの休日のように学齢期前の二人のお嬢さんと散歩、夕食をとり、入浴後横になって読書の最中、突如脳出血の発作に見舞われ、そのまま帰らぬ人となられたそうです。心からの哀悼の意を表し、彼の御冥福を祈り、かつ残された方々が一日も早くこの悲しみから立ち上られる事を願うものです。（広瀬実記）

五月二十日、右脚骨折のため、療養中の腰原君は、近日中にギプスもとれそうとの事で、九月中には又元気な姿をみせることと思います。

又、二年位前から椎間板ヘルニヤと闘病中の久野君は、最近、手術を行ない、一応成功したらしいとの事を聞いています。（菊池豊記）

発行所　東京都千代田区三崎町二丁目九番十八号
東京歯科大学同窓会
電話東京(二六二)三四二一(代)
編集兼発行人　渡辺冨士夫